

川喜田二郎『発想法』を読み直す

風間 誠史

序の序

柿木原先生と高橋先生のご退職記念号だと言われて、何か書かなければと思うのだが、すぐ形になるようなものがなく、『相模国文』にはふさわしくないかもしれないが、こんなエッセイを投稿させていただくことにした。当初は本学紀要への投稿を予定していたものである。言い訳をさせてもらえば、柿木原先生は本学の「発想」教育の推進を掲げた「ブランディング推進委員会」に参加され積極的に活動してくださった。高橋先生は短期大学部長をお務めになり、やはり本学全体の方向性に寄与された。そしてなによりもお二人は、創造的な表現活動をされており、日本語日本文学科のなかで最も「発想」力に富む方々である。と、まあ、こじつけだが、そ

ういうことでお二人に献ずるエッセイとさせていたただく。

序

本学は「見つめる人になる。見つける人になる。」というスローガンを掲げ、「見つめる人になる。」ためには発想力が必要との考えから、「発想教育」について模索し、また「発想力育成」を対外的なアピールとしてもしてきた。これは、念のために言うところ私の発案ではなく、私の「政策」でもない。私が学長になった時点で、この流れは既に出来ていて、私は単に尻馬に乗っただけである。

しかし、私は「発想」の重要性についてはまったく異論はなく、というより、もともと自分の研究は「発

想」がすべてだと考えてきたので、この本学の方向性については大賛成なのである（拙稿「発想と古典文学―さがみ発想講座の実践報告」（『相模国文』43号）参照）。そして、学長になったこともあり、この間あらためて「発想」について考えることも多くなった。それを少しずつアウトプットしておきたい。

『発想法』再読

学問・研究の世界に入ったところから「発想」には興味があつたが、「発想」という言葉を意識したのは何と言つても川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』（中公新書）に拠るところが大きかった。多分学生時代にこの本を読み、私の「発想」のイメージはそこからできあがつたはずである。というわけで、数十年ぶりにこの本を読み直してみた。ちなみに『発想法』の刊行は一九六七年、今年二〇一七年はこの本が世に出てちょうど五十年、半世紀である。

読み直すと、やはり懐かしいというか、自分の学問・研究の方法的なお手本がここにあつたということ、当時この本を読んで感動し、この方法で自分も創造性豊かな

研究ができるはずだと考えたことを思い出した。ただ、実際には川喜田が示しているような膨大なカード（データベース）作りなどは、怠惰な私には真似できず、せいぜい自分の思いつきをランダムに書き出して、それを流れ図的に組み立てるくらいで、結果的には私はこの『発想法』（つまりいわゆるKJ法）を実践できたわけではない、ということも確認せざるを得なかった。つまり私は『発想法』という本から、発想の技法を学んだわけではなく、むしろ学問・研究の基本的な理念を学んでいたのである。

とはいえ、『発想法』という本はほとんどが技術的・具体的な方法の紹介・解説からなっていて、理念を高説するわけではない（それ自体が斬新な「発想」だった）。しかし、方法論の前提に理念的なものがないわけではなく、冒頭の十数ページに簡略にそれは述べられている。そこではまず、「発想法」とは、論理学的方法としては「演繹（デダクシオン）」「帰納（インダクシオン）」とともに第三の方法とされる「アブダクシオン」に当たるということが述べられる。これは上山春平から教わったと記されていて、川喜田自身がそれほど積極的に語っているわけではない。上山からの示教として、このアブダク

ションを日本語に訳せば「発想」だろうということ、またアブダクションの重要性を指摘したのはプラグマティズムの祖であるパースだということが簡単に述べられている。

アブダクションについて

川喜田はこういう理念的なことには興味がないので、以上の簡略な説明ですませてしまおうのだが、「発想」とはアブダクションだというのは極めて重要な指摘で、ではアブダクションとはどういうものなのか？本来であればパースの本に当たるべきだが、ここでは別の本からその概要を紹介しておく。

科学にとって、最も本質的な営みは、「演繹」(deduction)でも「帰納」(induction)でもない第三の推論方法の「創発」(abduction)であること。最初に論じたのは、米国の哲学者チャールズ・ピアース(1839～1914)である(Pierce 1965)。ピアースは、

- 1 驚くべき事実Sが観測された。
- 2 ある仮説Pが正しければ、Sは当然の帰結とな

る。

- 3 よって、仮説Pが正しいと考える理由は存在する。

と述べた上で、SからPを導く推論の方法を「創発」と呼び、「科学知はすべて創発によってもたらされる」とした。「創発」は個別の事実を最も適切に説明できる仮説を導く推論方法であるため、「仮説形成」「仮説的推論」とも訳される。

実に要を得たまとめだが、これは山口栄一『イノベーションはなぜ途絶えたか―科学立国日本の危機』(ちくま新書)から引用した。ちなみにこの本は基本的にはタイトルからうかがわれるように、現在の日本の科学の危機を論じた政策論なのだが、その根底に学問・研究のあり方についての理念が明確に示されており、学問論としても名著と言つてよいと思う。そして、その理念的な部分は『発想法』と軌を一にしており、ここでアブダクションを科学の本質としていることは偶然ではない。アブダクションを「創発」と訳しており、川喜田の『発想法』は意識されていないようだが、紛れもなく、現代版『発想法』であり、いずれこの本の内容についてもコメントしたいと思う^(注)が、それよりも実物を読んでほしい。最新

のトピックに関する著作でもあり、誰でも読める本である。

話を戻す。アブダクションについて、とりあえず方法論としてはこの説明で理解できると思うが、パースとその時代的・思想的背景についてもある程度知っていないと、本当の意味でのアブダクションの重要性はわからないので、そのことを少し補足する。なお、私は若いころパースの著作も読んだが、今回は読み返す余裕がなく、たまたま書店で手にした伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書）に拠った。以下のパースやプラグマティズムについてのコメントはその受け売りである。受け売りだが、私が理解した範囲での受け売りなので、その可否の責任は私にある。

パースはプラグマティズムの祖であり、それはつまり二十世紀の論理実証主義を経て分析哲学にいたる流れの源流ということである。これは今年の入学式で話をしたが、二十世紀は科学の世紀であり、もはや科学的な事実あるいは真理以外に真理はないということが自明になった時代であり、哲学が科学的真理と別のものを真理として追究したり議論したりすることはできない、あるいは無意味だということになったのだが、そのことをおそら

く最も早い時点で明確に論じたのがパースである。パースはデカルトのいわゆるコギトを批判し、「我」も「思う」も自明ではなく、科学的な真理探求の先にしか真理はないという、当時としては恐るべき大胆な説をなしたのである。

プラグマティズムについて言えば、それは実用主義などと訳されるが、出発は今紹介したように、デカルト的な自明な（とされる）理念から演繹的に思索するのではなく、また通常の帰納法が行うような一般的な（と思われる）事実から思索するのでもなく、理解に苦しむような事実に対して仮説を提示するところから思索するというものである。そして思想や真理は、そうした具体的な問題の解明に役立つかどうかが重要で、そうした有用性を離れた真実とか真理など存在しない（というか考えても意味がない）というのが、つまり実用主義である。これは、繰り返すが今日の科学・学問においては、ほぼ常識というか基本理念となっている。

『発想法』批判 ―学問論について

というわけで、「発想」あるいは「発想法」は現在の

科学・学問の基本理念と不可分なもので、今日の学問のあり方をさらに考えていく必要があるのだが、今は川喜田の本に戻ろう。先に見た通り、川喜田はあまり理念的なことには興味がないようで、アブダクションについても借り物の説明ですませているのだが、学問のあり方については彼自身の言葉で独自の論を述べており、冒頭十数ページの導入部の大半はそれに費やされている。

川喜田はそこで学問を大きく三つにわけ、「書齋科学」「実験科学」そして「野外科学」である。「書齋科学」は伝統的な人文科学の大半、「実験科学」はいわゆる理系の学問の大半、そして「野外科学」こそが川喜田自身が取り組んでいる学問で、文化人類学に代表されるフィールドワークを必須とする分野である。そして川喜田はこの「野外科学」の方法論として「発想法」、あるいはアブダクションを提案しているのである。

今回数十年ぶりにこの本を読み直して、一番驚いたのはこの部分である。いや、この部分の記述に驚いたのではなく、この部分をかつての私が全然気にとめていなかったことに驚いたのである。川喜田はいわゆる人文科学を「書齋科学」と呼んで、ほとんど侮蔑している（と今回読んで感じた）。川喜田に言わせると「書齋科学」

は文献に依存して、頭の中で推論する（だけ）。「現実界を観察しないで、一応学問が成立していた」とか「書齋科学のいうことはほんとうかどうか、きめ手がない」と述べ、そこで今は「実験科学」が科学の中心なのだと述べている。ちなみに「実験科学」についても、それは「仮説検証的」な学問と述べ、仮説の提起ではなくその検証（つまり実験）が中心だと見ており、これも相当に侮蔑的である。そして、「野外科学」は現実を見て、そこから仮説を提起（つまりアブダクション）する学問だと述べている。

私が驚いたのは、私はまぎれもなく人文科学つまり「書齋科学」の研究者、というかそれを志していた者であるのに、こうした記述に特に違和感を感じることもなく、むしろ「野外科学」の方法論だという「発想法」を、自分の学問に充分適用可能だと考えていたということなのである。そして、その点は今回読んでも変わりはない。

結論から言えば、川喜田の言う「野外科学」は、決して特殊な学問ではなく、文系・理系を問わず、学問とは多かれ少なかれ課題発見から始まり、したがって基本は「発想」なのである。それは先ほど見たパースの「科学知はすべて創発（アブダクション）によってもたらされ

る」という言葉が既に語っていた（もちろん当時は実に非常識な見解だったが、これが百年以上の歳月のなかで常識として定着していった）。

揚げ足をとるようだが、たとえば川喜田は次のように述べる。

孔子が下町に実験室を建てたとか、中世の神学者が学問をするために、野外観察に歩きまわったということはあまり聞いたことがない。

中世の神学者のことは知らないけれど、孔子は実験室は建てなかったが、別に書斎に籠もっていた人ではない。彼は諸国を遍歴し、現実社会の変革に一生を捧げた「野外」の人である。そして孔子の言葉を記した『論語』が東洋の人文科学の出発点であり大きな基礎をなしていることは言うまでもない。ちなみに日本の江戸時代の『論語』受容は、伊藤仁斎に代表されるように実践的、プラグマティックな面が強い。人口に膾炙した「論語読みの論語知らず」という諺は、『論語』を抽象的な知とするのではなく実践に生かすことが本筋だということを示している。

「実験科学」についても、川喜田は実験すれば事実が検証できると考えているようだが、もちろんそんなこと

はない。今日の科学では、実験の結果明らかになる「事実」といつても、それは目に見えたり手で触れたりできるわけではなく、実験結果が理論的に説明されることで事実と認定されるのであり、「科学的事実」とは何か大きな議論となっている。つまり、実験によって明らかになったモノやコトは、本当に実在すると言えるのかということである。例えば素粒子という目にも見えないうし触ることもできないモノは本当に実在すると言えるのか？ その実在を支えているのは、アブダクション以外の何ものでもないのではないか（少なくともアブダクション——仮説的推論——が根拠であることは動かない）。だから、これも入学式で述べたことだが、現在では科学とは、あるいは科学的な実在（つまり「世界」とは、実は言語そのものである（アブダクションを含め論理的な操作は言語でしか行えないから）。なお、このあたりのことについてはイアン・ハッキング『表現と介入』（ちくま学芸文庫）に私なりに学んだことを受け売りしている。文責が私にあることは前に同じ。

というわけで、これは五十年目の川喜田『発想法』への批判ということになる。きつと五十年前にもこういう批判・批評はあったのだろうか、私は今頃気づいたので

ある。そしてあらためて確認するが、私はこの川喜田の誤解を、数十年前に読んだ時も、今も、全然気にしていない。やはり川喜田の提示した「発想法」は素晴らしいと思うし、アブダクションの具体的な技法としてKJ法は普遍的な価値を持つと思う。

『発想法』の普遍性 ―「無の哲学」

『発想法』という本の大半は、具体的なKJ法の紹介と解説にあてられているわけだが、これについては今更紹介するまでもないだろう。学問研究の範囲を大きく超えて、さまざまな場面に応用・利用されており、そのことによってその価値は保証されている（有用性こそが価値である）。

それでも今回読み直して、あらためてすばらしいと感じたのは、「発想」というものを、個人の頭から何かをひねりだすものとしてではなく、基本的に複数の人間がアイデア（というか思いつき）を出し合って、それをやはり複数の人間が関わりながら整理してゆくプロセスとして捉えているところである。パースは、先にみたように科学的真理がいわば哲学的な真理であるべきだと考

えたわけだが、その場合の科学的真理というのは、共同体の合意形成によるもの、つまり科学者たちが全体として同意したものを指すのである。それは「真理」というものの古典的理解からすれば、きわめて偶然的で不安定で、およそ「真理」の名に値しないように見えるわけだが、しかし実用主義（プラグマティズム）の観点から言えばそれこそが有用な真理であり、唯一の真理なのである。そう考えると、川喜田「発想法」の基本となる共同的な学問・研究のあり方というのも、パースの提起したアブダクションと極めて親和性が高いというか、通底していると言えるのではないか。

さて、川喜田の本は、最後に「無の哲学」ということを述べている。大半が徹底した実技解説から成るこの本のまとめとしてはいかにも唐突なのだが、最後に少し理念的なことを述べておきたかったらしい。「無の哲学」とは、要するに事実あるいはデータに虚心に向き合うということを言っている。本文を引用すると、

……この方法には、人間がものごとをなすにあたっては、みずからのうちなる意図を外に働きかけて設計し造型するだけではだめで、逆に外のものを虚心に受けいれて考えようという、徹底した受け身の精

神が宿っている。それゆえ、この後者を、西洋的な「有の哲学」に対して東洋的な「無の哲学」と表現するのも、おもしろからう。

ということである。これは本学のスローガンが「見つかる人になる。」の前に「見つめる人になる。」を置いていることとも通じるように思う。じつと、じつくりと「見つめる」ことは、いわば自分を一度「無」にすることだろう。

さらにこの「無の哲学」について川喜田は次のようにも述べる。

……受け身の心がなく、積極的に外に働きかけようとするだけのプランには、どこかに嫌味があり不自然さがある。ありのままの世界を受けいれようとして、おのれの小さな我に固執しているところがある。その態度は一見積極的にみえたり、表面的に創造性が高いように受けとられるかもしれない。しかし、人と人の心をつないでゆく力はもちえない。状況に柔軟に対処してゆくこともできない。

このあたりを見ると、ここで川喜田が言っている「無の思想」とは、単に現実やデータに虚心に向き合うというだけではなく、他者を受け入れるということを含んでい

る、というかそれを重要な要件としてしているように思える。そしてそれは先に指摘したように、そもそもKJ法がグループでの課題解決を前提とした「発想法」であるということと不可分のだろう。個人、あるいは「私」のアイデア、発想を重視するのではなく、他者との共同・協働のなかで、現実のあり方のなかから育まれてきたものこそが、本当の「発想」だ、というのが川喜田の本の結論であり、実際、川喜田の「発想法」(KJ法)とは、特別な才能に恵まれた人にしかないと思われていた「発想力」を、誰もが、一定の手続きに沿った努力を惜しまなければ持つことができる、ということを示したわけだ、その画期性は半世紀経った今日でもまったく古びていない。

最後に我田引水をさせてもらえば、私が「さがみ発想講座」で行っている連歌・連句というのは、まさに「我に固執」せず「人と人の心をつないでゆく」ことで成り立つものであり、「状況に柔軟に対処」する力を養うものである。

【注】 今年度の本学紀要（相模女子大学紀要81）に、「山口栄一『イノベーションはなぜ途絶えたか』を読む―相模女子大学の「発想」教育との関わりから―」として発表。

【参考文献】

川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』（中公新書、一九六七）

山口栄一『イノベーションはなぜ途絶えたか―科学立国日本の危機』（ちくま新書、二〇一六）

伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書、二〇一六）

イアン・ハッキング（渡辺博訳）『表現と介入 科学哲学入門』（ちくま学芸文庫、二〇一五）

以上は本文中に書名を挙げているが、ほかに哲学史全般について依拠したのは、

青山拓央『分析哲学講義』（ちくま新書、二〇一二）
（本学教授）